

牧野恵子

7/31か8/1、山で、あるいは深志の庭で、何人もの友と会う。その途端、今自分が生きている土地での憂いは消え失せ 思いは独標に向かってしまう。

登っていなかったのに、いつも思ってしまった「なぜ、私が生き残ってしまったのか」という苦しみは以前ほどは無い。けれど、涙は溢れてしまう。

10年前、初めて独標に立った時、ここに「いる」私の心を駆け抜ける思いがあった。いったい何だろう？その答えを求めて何回か登った。もしかしてもしかして、私（私達）を生かしてくれているのは11人の仲間？という恐れ多い言葉が時々頭をかかすめることがある。それが答え？わからない。だけど、いつか彼の岸に行った時、先に着いている11人と真っ直ぐ向き合って、笑顔で会える人間になりたい。なれるだろうか。

百瀬修平

発電機器関係の仕事をしている為、発電所を止めない夏は休暇が取り易い。日本に居る時は毎年早い夏休みを取り、学校での慰霊祭に参加していた。

10年前に慰霊登山のことを聞いたが、私にとって登山は遠い存在だった。一年のクラスからは誰も事故に巻き込まれなかったことや、クラスメイトになって4ヶ月しかたっていなかったこともあり、あの時、一緒に登ったり、次に登る予定になっていた同級生や、11人と親しかった、言わば内野のみが参加するのが慰霊登山だと思っていた。外野に居た私が慰霊登山に参加するのは、内野の人の輪に土足で踏み込むことになるのではないかと恐れたのだ。

そんな私の考えを変えたのは、慰霊祭に参加される遺族が年々年老い、数も少なくなってきたことだった。残された遺族に顔を会わせ続けるのも辛いし、学校に行き、慰霊祭前後の30分で一年を振り返り、11人と対話するのも忙しすぎるのだった。



内野の人達には迷惑を掛けているかもしれないが、4年前から独標に登ることにした。昔のことを思い出したり、今年はこんな事があった、来年はこうしよう、などと色々なことを考えながら、一步一步独標への道を辿ることで、11人との対話を楽しんでいるこの頃の私である。